
浅葱色のヒーロー

義成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浅葱色のヒーロー

【Nコード】

N3651I

【作者名】

義成

【あらすじ】

中学生最後の三月、受かった高校を蹴った片岡啓一の下に、一通の封筒が届けられた…。

その一通の封筒を開くとき、片岡啓一の、異世界でのSCHOOL LIFEが、始まった……！！

※現在、内容やら何やらを鋭意修正中。

プロローグ

普通、運命の歯車は神様が持っていて、人間がどうにかしようとしても、どうにかできるものではない。
だが、その運命の歯車を変えることができなくても、それに足掻くことはできるのではないだろうか？



《三年一組、片岡啓一。至急職員室まで来なさい。》

片岡啓一は校内放送で、名前を呼ばれたときも、さして驚く素振りも見せることもなく、教室から出ていく。

呼ばれた理由はすでに分かっていた。

実際、耳にタコが出来るほど教師からも親からも言われ続けたし、そろそろ決着もつけなければならぬだろう。

そんなことを思いながら、啓一は、廊下ですれ違う同級生の、好奇の視線を一身に受けながら、ゆっくりと職員室に向けて歩いていく。

俗に中学生の受験戦争と呼ばれるものが終わって、合格発表も終わった三月の中盤。全ての学生が、慣れ親しんだ学校を惜しみつつ、新たな出会いに胸を膨らませる、そんな季節である。だが、今ここにそうではない人物がいる。

彼の名前は片岡啓一。

黒の髪に、黒い目。極々普通の日本人の特徴を持つ少年である。ぱっと見では、かなり明るそうな印象を受ける。しかし彼は今、大きな問題を抱えていた。

通常なら、この時期の一般中学生は、よほどの事情がない限り、すでに進路先が決まっているはずである。

しかし、彼は中学卒業後の進路が、決まっていなかった。

それは彼の特殊な家庭環境が原因であり、彼自身の意志でもあった。

しかし、それを話すのはまだ先の話。



「…えっと、先生のおっしゃられてることが、俺にはよく理解出来ないんですが…」

「だから、さつきから言ってるだろう。ナハムドワード魔法学園高等部から、お前宛に推薦状が来ている。是非とも、うちの学校にお前が欲しいから、入学してくれ。ということだ。向こうにも失礼だから、そろそろ観念して入学を受けろ」

ブルドックによく似た啓一の担任は、啓一に大きな封筒を渡しながらそう言った。

「…エイプリルフルって四月でしたよね？」

「誰も嘘なんぞついてないぞ？その封筒のとこ見てみる」

言われた通りに見てみると、確かにその学校の校紋らしきものが描かれており、ご丁寧にも電話番号と住所までしっかりと明記してある。

エイプリルフルの仕掛けにしては、あまりにも凝り過ぎだろう。

「とりあえず、親御さんにそれ渡して、しっかりと話しろ。いいな？」

「…」

無言の啓一を見て、啓一の担当は大きくため息をつく。

「…お前が親御さん嫌ってることは、重々承知してる。だがな、お前の人生がかかってるんだ。しっかり話し合え。いいな？」

「…はい」

啓一はしぶしぶ返事をする、担任に軽く一礼すると、職員室から足速に出ていった。

「魔法学園か…。
あほらし」

啓一はそういうと、縦に横に、びりびりとA4封筒を破き、ぐちゃぐちゃに丸めて、廊下の隅に投げ捨てた。

「：だいたい、そんな怪しげなところ、親父が了承するわけないし。そもそも魔法なんて、そんなファンタジーみたいなこと、あるわけないし：」

そう言い捨てた啓一の言葉は、誰もいない廊下に微かに反響し、その姿を消していった。

――
――
――
――
――

啓一が去った後。

廊下に捨てられた封筒にある訪問者が現れた。

それは猫――全身漆黒の毛の色をした猫だ。その優雅な歩き方、そして、人間のテリトリーを堂々と闊歩するその威厳。多くの人間は、その漆黒の猫に見とれることだろう。

そして、最も特徴的なのは、その二又に分かれた尻尾である。

日本人の多くは、二又に尻尾が分かれた猫を見ると、恐怖と不安に駆られることだろう。だがその猫は、そんな恐怖と不安を感じさせることさえできないほど威風堂々としており、美しかった。

その猫が、ゆっくりと啓一の捨てた封筒に近付いていく。

「はああ…。何故この世界の人間は、不可解なことを素直に信じ、

受け止める感受性が無いのかね…。」
そういうと、その猫は前足でそれを転がすようにして弄る。

「こんなにしちゃって…。せっかく作ってくれたのに、もったいねえな。全く」

破かれて丸まった封筒は、ゆっくりと宙に浮かび上がると、ばらばらにされたパーツが元のところに組み合わさり、そして元のA4封筒の姿に、完璧に復元された。

猫はそれを満足気に見ると、一瞬のうちに、封筒とその姿を消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3651i/>

浅葱色のヒーロー

2010年10月21日07時19分発行